

ISSN 0910-7282

大阪府立図書館紀要

第 35 号

2006 年 3 月

Bulletin of Osaka Prefectural Library No. 35

大阪府立中之島図書館

大阪府立中央図書館

紀要の再刊について

大阪府立中之島図書館館長 石崎重雄

昔、学生の頃、各学部の発行する雑誌に「紀要」という言葉を使っていたことを思い出す。その殆どを読んだ記憶はないが、こんな難しい文章をよく書く人がいるなど感心したことを覚えている。読ませるよりは書きたいことが縷々述べられていて、書く文化とも云うべき領域があると思った。話すことから書くに至る数万年の歴史のなかで書く行為はほんの僅かな時間であったと思うが、書くことの決定的な歴史的意義は本人にとっても、他人にとってもそれが後世に残ることに尽きると思われる。尤も書いたものが全て事実であったり真実であったりすることはないことすべての書物に共通していること、誰でも分っていることとしても。

日本人は話べたであるし、また論理よりは情が先行するため、どうしても話し言葉を文章化するのは難しくしてしまう。大阪弁や落語を書き言葉にできないように。そこで書き言葉に創意と工夫を凝らして、漢字、カタカナ、ひらがな、和製英語や和製漢語を駆使して文章化していくことになる。そして世界中で一番難しい言語を形成してきた。難しい書き言葉を普及させ、後世に残すために出版が起り図書館ができた。

図書寮は民草の書籍を集めるだけでなく、自らの人材を擁して、官製とはいえ自らの書物も多く作成したに違いない。その時代、時代の要請を受け、また書き人の趣味や遊びや信念を著すものとして、かつては貪るようにして読まれ、尤も、図書館が出来てから黙読がはじまり、朗読が廃れたというのは本当かどうか知らないが今は活字文化の一翼をになうものとして。

大阪府立図書館紀要もこのような歴史的経緯を踏まえたものとして発行され、1964年に第1号を出版して今回第35号を久しぶりに発行することにした。今回新たに、執筆された論考府立図書館に勤められていた方、現に勤められている方のいずれも力作である。

司書がこのような形で書くという行為を紀要で纏められたこと、今後の図書館司書のあり方やまた活字文化の一端の担い手として意義深いものだと思われ、自画自賛し復刊への挨拶としたい。

最後に「国破れても、言葉あり」としたい。そのためにも紀要の継続を期待する。

「大阪府立図書館紀要 35号」

巻頭 紀要の再刊について 石崎 重雄 中之島図書館長

目 次

寸描 天王寺分館から夕陽丘図書館へ	貴田 春男 (3)
少年院と図書館サービス	脇谷 邦子 (7) 日置 将之
「子どもの本を読む会」の果たした役割	前田 千慧 (33) 大西 登貴子 前野 貞子 脇谷 邦子
『大原文庫』をめぐって(第1部) 大阪府立図書館収蔵までの道程 大原社会問題研究所と大阪府社会事業会館 -	森田 俊雄 (47)
翻刻 役者更紗目鏡	佐藤 敏江 (一)
福澤諭吉『覚』についての考察	稲垣 房子 (三十七)
小野十三郎遺漏詩二十四篇	高松 敏男 (四十七)

編集後記